

肖像表現における言葉と物

似絵の位置づけを巡って

伊藤大輔

Words and Objects in Portrait Expressions: The Positioning of Nise-e, the Portraits
ITO Daisuke

はじめに

- ①「似絵詞」の意義
- ②「似絵詞」の思想
- ③「似絵詞」の創作主体
- ④似絵の行方

【論文要旨】

本論考では、「似絵詞」を軸に、似絵の時期区分を試みている。「似絵詞」とは後堀河院の仰せによって制作されたもので、当時優れた技芸の持ち主であった八人の人物の似絵を描いた肖像画巻の詞書部分である。「似絵詞」成立の前後には、そこに採り上げられた八つの技芸と同一または類似する技芸を単独で主題とする似絵が集中的に作られており、この時期の似絵制作の動向を「似絵詞」が総括し、強い規範性を発している、一つのまとまりを作っている点が注目される。

「似絵詞」に示された似絵観は、技芸の盛んな様を示そうとしていることから分かるように、文雅の興隆を国家隆盛の証とする儒教的政教主義の思想を背景としている。技芸を主題とする似絵が制作されたのは九条道家が宮廷政治を主導していた時期であり、このような似絵観の成立を主導したのも、道家であったと考えられる。道家の政治思想は儒教的な徳治主義に自覚的に立ち戻ろうとしている点に特徴があり、それが「似絵詞」に代表される後堀河院政期前後の似絵の技芸的テーマを好む傾向と軌を

一にしている点からもそのことはうなづける。似絵は徳治の具体的な証明であった。

しかし、道家没後の似絵は、儒教的政教主義、徳治の証明としての似絵という路線からは変質してゆく。一方、道家登場以前の似絵は、行事絵という具体性の強い分野と融合し、思想的な抽象性にまでは十分に至っていない。このように、似絵史は、道家時代を中心に、その前と後という形で、三期に区分できる。

一般に肖像は不在の身体の再生であり、文化的表現行為というよりは、自然の物質や生命の問題と考えられがちである。それゆえ自然の原理に人為的に介入しようとする呪術との関わりも問題になるのであるが、これまで見てきたように、似絵は生命を含めた物質的自然というよりは、言語的な思想を表現するものである。似絵研究は、物から言葉へとその視点を移行させる必要があるのである。

【キーワード】似絵、似絵詞、九条道家、肖像、呪術